

Glocal Tenri



6

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.12 No.6 June 2011

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
東日本大震災・・・何故？
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (66)
その他の文書⑨
／安井幹夫 2
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (80)
コンゴ伝道に見る異文化接触 [46]
／森 洋明 4
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (30)
宗教者による心のケアの目指すもの
／金子 昭 5
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の
民族誌学 (27)
いたずら好きな太陽
／井上昭洋 6
- ・ 世界平和のための宗教対話 (26)
前ローマ法王ヨハネ・パオロ2世「福者」に
／山口英雄 7
- ・ 天理スポーツ (13)
天理スポーツ シンポジウム③
／難波真理 8
- ・ アメリカ通信 (3)
バークレー留学体験記：theology に託
す気持ち
／深谷耕治 9
- ・ English Summary 10
- ・ おやさと研究所ニュース 11
天理教の救援活動について報告—宗援連第1回
情報交換連絡会に参加して—／第237回研究報
告会／平成23年度公開教学講座「現代社会と天
理教」(2)／ペルシャ古典音楽演奏会／「教学
と現代Ⅷ」のお知らせ／おやさと研究所からの出
版物一覧／平成23年度公開教学講座のお知らせ

巻頭言

東日本大震災・・・何故？

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

「私たちに過誤があったのか？…廃墟にた
たずめば、しかしながら、そのような設問は
しない。廃墟にあってはしばらくのあいだ一
切の問いという問いがかき消えるのだ。ひた
すらに奇幻に打ちのめされて恐懼して自失す
る。ああそうだったのか、というおもいと、
なぜなのかという疑念が妙にとけあって、あ
るべき問いはなかなかたちあがらない。もの
を問うとは、おもえば、じつに上等でぜいた
くにすぎるほどのこころみなのだ。」

東日本大震災の後に目にした多くの論考の
中で、最も筆者の心にしみたのが、ある作家
のこの言葉です。“ものを問うとは贅沢なこ
となのだ”というのは、実際に廃墟に立った
人の真実の言葉でありましょう。

しかるに、時が経つにつれて、やはり人間
は「何故？」ということを知りたいくなります。
他の動物のように、自らの運命をただ黙って
受け止めるだけでは済まされないのが人間で
あって、皆がそれぞれの立場で、「何故？」を
問うようになる。それが人間の人間たるゆえ
んであり、自然な姿であると思います。

ところが、今回の大震災のような大惨状を
前にしては、その「何故？」に対して、“こ
れが震災のおきた原因である”などと答える
のは、容易なことではありません。と申すよ
り、たとえば、“大震災に対する神意はこう
である”とか、“人間にこういう過誤があっ
たからこうなった”などと、上から目線で十
把一絡げの答えが出せると考えること自体が、
人間の傲慢だと思うのです。

「おふでさき」(御神言)には、
をやこでもふうへのなかもきよたいも
みなめへへにちちがうで (五-8)
と、家族の中でも皆の心がそれぞれに違うと
教えられています。したがって、その違う心
の遣い方の結果として現われる人生模様も、
また一人ひとり違って来る。つまり、生きた
時代や場所が同じであっても、ただそれだけ
で皆同じ道筋をたどるほどに、私たちの人生
は単純なものではないのです。

換言すれば、親神様は、“何々地方の何万
人を、一まとめにこうしてやろう”などと大

雑把なことはなされない。皆一人ひとりの心
の道・いんねんを見定めて、それに相応しい守護
を、個々別々にしてくださるということです。
ですから、誤解を恐れずに言えば、東日本大震
災でいのちを無くした万余の人には、各々の出
直す理由があったのであり、数十万の被災家族
には、数十万通りの各々の物語があったとい
うことなのです。

この度の大地震では、他の人をたすけるた
めにいのちを亡くした人が大勢ありました。
また、年端のいかない子供もたくさん亡くな
りました。あるいは、道一つ隔てただけで、
家や田畑が波に浚われるか否かが分かれたり
もしました。その数々の不可思議な現実を見
てのやりきれない思念が、人々の心に沈殿し
ていると思います。

しかるに、そういう義人の殉死や幼子の出
直も、あるいは彼我の違いに戸惑う財産の喪
失も、全て親神が各々のいんねんを見定めら
れた上での結果なのです。“何故あんな立派な
人が？ どうしてあの幼気な子が？”と思う。
また“何故他の人でなくて私が？”と思っ
たりもする。目の前の現実だけを見れば、不条
理に思えることが多々あるでしょう。しかし、
前生、今生、来生を見通せば、一人ひとりの
帳尻が必ずきちんと合う。それが末代続く親
神のご守護の世界なのです。

道の先人の残した書物に、「身上は助かっ
ても、助からないでも、神様のご恩は報います、
といふ精神が定まったら、これを“かりもの
の理”がわかったと云う。身上助からなんだ
なら、まあ、尽くすことはやめぢや、とい
うような信心では、かりものの理がわかったと
も、又、真実の教祖という理がわかったとも
言わせん。」とあります。

“自分は助かるはずなのに何故？”とい
うのは、自分を神様の上に置いての思案です。
そうではなく、かりに人間には想定外のことが
起きても、“神様のなさることには間違いはな
い”と信じて、ひたすら神恩報酬に努めて通る。
そうすれば、いつの日か必ず、今の「何故？」
への本当の答が見つかる時がくると思うので
あります。